

地域福祉学専攻での研究の意義

地域福祉学専攻長 井上信次

新見公立大学大学院地域福祉学専攻では、地域に暮らす人々の生活課題を、福祉の視点から実証的に捉え、支援のあり方を考える研究を行います。特に新見市を含む中山間地域では、人口減少や高齢化が進み、都市部とは異なる福祉課題が生じています。岡山県全体でも人口減少と高齢化が進んでいますが、新見市ではその傾向がより顕著であり、2020年時点で高齢化率は41.4%に達しています。また、人口密度も低く、広い地域に少ない人口が分散して暮らしていることから、医療・福祉サービスの提供にも大きな制約があります。

中山間地域では、介護サービス、障害福祉サービス、成年後見制度、学校教育など、さまざまな分野で課題が見られます。例えば、グループホームや相談支援事業所などの社会資源が都市部に比べて少なく、専門職の確保も難しい状況があります。また、公共交通機関が限られているため、福祉サービスを利用するための移動手段にも困難が生じやすくなります。さらに、一つの事業所が広い地域を担当せざるを得ないため、支援が広域化し、支援者側の負担も大きくなります。制度や支援に関する情報が届きにくいことも、地域住民の孤立や支援の遅れにつながる可能性があります。

こうした状況は、高齢者福祉だけでなく、障害のある人、子ども、生活困窮者、家族介護者など、複数の生活課題を抱える人々の支援にも関係しています。中山間地域では、地域性を踏まえた実践や研究が十分に蓄積されているとは言いがたく、都市部を前提とした制度や支援方法だけでは対応しきれない課題も多くあります。そのため、地域福祉学の研究では、まず何が支援を妨げているのかを丁寧に分析し、そのうえで地域に合った解決策を提示していくことが重要です。

地域福祉の実践には、現場での経験や感覚が欠かせません。しかし、それだけでは課題を社会に伝えたり、制度や政策の改善につなげたりすることは難しい場合があります。大学院での研究は、現場で感じている問題を「言葉」にし、科学的な知識として整理する役割を持っています。地域の課題を明らかにし、支援の必要性を根拠をもって示すことは、地域を変える第一歩になります。

地域の課題は、研究によってすぐに解決するものではありません。しかし、地域の課題を社会に発信し、制度や政策の改善につなげるためには、課題を言語化し、エビデンスに基づいて示していくことが重要です。地域福祉学専攻で学ぶ意義は、現場の実践と研究を結びつけ、地域共生社会の実現に向けて、社会を変えるための知を身につけることにあります。皆さんの研究が、地域を変えるきっかけになるかもしれません。

地域福祉学専攻での研究

・過去の修士論文

地域福祉学専攻

- 知的障害のあるまたはその可能性のある人への見守り支援の課題
- 中山間地域の集落から他出した子が求める相談先としてのケアマネジャーの危機介入に関する研究
- 新見市における「通いの場」の現状と効果の探索的研究：量的・質的分析
- 特別養護老人ホームにおける新人介護福祉士に必要とされる実践的スキルと社会人基礎力の課題

中山間地域における支援

人口減少・高齢化
社会資源の不足
移動手段の制約
支援者の不足
広域化
情報の孤立
進学意欲の低下
忘れられやすい



支援体制の担い手が少ない
グループホーム、相談支援事業所などが都市部より少ない
福祉サービス利用へのアクセスが困難
専門的支援をする専門職の不足
一つの事業者担当する地域が広い
支援制度や後見制度の情報が届きにくい
地位達成がしにくい
中山間地域の地域性を意識した実践・研究が乏しい

課題を乗り越えるために・・・研究と実践

- 1) 課題の分析（阻害要因等）
- 2) 解決策の提示